

# はじめに

本書は各界のトップランナーたちが、どのように図書館を使ってきたか、いかに情報を使いこなし、学び、育ってきたかをテーマにした本です。

そもそも図書館って、どんな存在なんでしょう。

本を貸し出すところ？ 受験勉強をするところ？ 研究者が資料／史料を集めに行くところ？ おそらく全部が正解です。二〇一五年の統計によると、全国の公共図書館数は三二六一館（出典『日本の図書館——統計と名簿』日本図書館協会）。大学図書館は一六八〇館（前掲書。短大・高専含む）。学校図書館法によって小中高の学校には図書館の設置が義務付けられています。だから皆さんも図書館を利用したことがあると思います。

でも、図書館って考えれば考えるほどよくわからない存在です。

皆、おそらく図書館に対し何かしら共通のイメージを持っているでしょう。しかし自分の住んでいる街の図書館と隣街の図書館とでは雰囲気は違います。また、規模が異なれば、おのずと展開されているサービス内容も異なります。さらに図書館が設置される組織（自治体、学校、大学、研究所など……）に応じて図書館像は異なります。よって図書館に対するそれぞれの経験や理想像は大幅に違う可能性があります。

様々な人達が図書館を論じています。今後、本はデジタルに移行するから紙媒体を図書館に置いておくことはもはや不要だという人もいれば、紙の本が持つ温かみが大事だという人もいます。調べ物を支えるために図書館が重要だという人もいれば、娯楽の本を無料で読めることが図書館の役割だという人もいます。蔵書の構築が重要だという人もいれば、コミュニティの形成支援が重要だという人もいます。「百人の社会学者がいたら百通りの

社会学の定義がある」という冗談があるようですが、「百人の人間がいれば百通りの図書館観がある」というのは言いすぎでしょうか。

とくに、情報機器やWebの発達によって相対的に図書館の価値が下落したように見えることや、社会変化によって図書館自体も変革を迫られていることが、このような議論の背景にあるのでしょう。「図書館」という共通のイメージがあるはずなのに（あるからこそ？）、いろいろな人が図書館に対して様々な提言を行っています。

ぼくは図書館情報学 (Library and Information Science) という、おそらく、皆さんのあまり馴染みのない学問領域を専門としています。図書館情報学とは図書館のことだけを研究するにとどまらず、情報や知識の生産や収集組織化（利用しやすいように整理すること）、提供、保存などを主たるテーマにする学問領域です。しかし、ぼくは研究すればするほど、これまでの自分の研究方法では自らが知りたいことと実際の研究内容が乖離していく感覚を抱いていました。つまり「図書館ってなんだろう」という自身の問いに対し、迷路の中の袋小路に行き当たったように感じていたのです。

そこで、それを打破するために従来あまり行われてこなかったアプローチ、つまり利用者がどう図書館を使って学んできたか、そしてどんなニーズや要望を持っているかを問うことにしました。「あとがき」で詳述しますが、これまで本アプローチはそれほど行われてきませんでした。その理由として、図書館は「利用者の秘密を守る」原則が関連すると考えられます。

本書で取り上げたトップランナーたちが書いた本や論文、作成したサービスは検索すればすぐ見つかります。しかし彼らの発想の源や、どのように情報を収集し、それを咀嚼し組み合わせる新たな知を生み出してきたかといった過程はなかなか知られていません。なので本書では図書館利用の方法を中心のテーマとしつつ、知の生み出される過程についても迫ることにしました。これらの問いを通じて、図書館の持つ共通項や異質項を掘り下げていき、将来の図書館の姿を少しでも探っていきたいと考えました。ただし、皆がてんでバラバラなことを言っていて、大変なことになるかもしれないという恐れもありましたが……。

本書には二人のインタビューが収録されています。

第一章は「スペシャリストを鍛えた図書館」。専門分野で活躍していますが、図書館を高頻度で利用しているイメージがあまりない人たちにお話を伺いました。

- 一―一、落合陽一さん。メディアアーティスト。テクノロジーと芸術を融合させ、人間と機械の境界線を溶かしてゆく「現代の魔法使い」。世界をあつと驚かせる天才にこれまでとこれからの図書館を聞きました。
- 一―二、清水亮さん。IT系企業の社長にして、子供時代は六歳にして3Dプログラミングを習得。わたしたちが今使っているWebサービスのあちこちに、彼の姿が見え隠れします。お仕着せの学校教育には満足できなかった彼を支えた仕組みに図書館がありました。
- 一―三、前野ウルド浩太郎さん。人呼んでバッタ博士。作物を食べつくすバッタの食害をいつかコントロールするという目的を持つ彼は、図書館のある一冊の本で人生が決まったと言います。

第二章は「プロフェッショナルの使い方」。図書館をディープに使いこなしているだろうと思われる人たちから、プロならではの使い方を探りました。

- 二―一、三上延さん。小説家。主要著作にミリオンスラーの『ビブリア古書堂の事件手帖』シリーズがあります。本好きの心を打つ作品はどのように執筆されており、彼は図書館をどう見ているのでしょうか。
- 二―二、竹内洋さん。社会や教育という掴み難い対象を温かく、鋭い目で切り込んでいく、すさまじい社会学者です。関西地方の図書館員が恐怖すると噂される彼の図書館の徹底的な使いつづりをじっくり聞いてみました。
- 二―三、谷口忠大さん。人工知能の研究者にして、ビブリオバトルの考案者。ビブリオバトルは五分間で本をプ

レゼンするゲームです。最近、図書館や書店でもそのゲームが受容されていますが、そもそも彼が提唱する「記号創発システム」と繋がっています。しかし、その観点を指摘した人はほとんどいません。追ってみました。

第三章は「Webの時代の図書館を活用する人々」。Webの発達によって、図書館は社会の中で激変しています。そうなる図書館は否応なく変わらざるを得ないところと、不変であるべきところがあるはずですが、そこを問いました。

三一 結城浩さん。技術ライター、プログラマ。高校生が数学を媒介にして対話する物語を描いた『数学ガール』シリーズの著者として有名です。彼の執筆する本は中学生や高校生から圧倒的な支持を受けつつ、同時に本職の数学者ですら舌を巻くといえます。でも、なぜ数学ガールの舞台は学校の図書室なんですか。

三二 荻上チキさん。評論家、ニュースサイト「シノドス」編集長。現代はWebの発達によって大量の情報が流れるようになりました。玉石混交の言説が飛び交うなかで、新たな言論プラットフォームを構築する彼は、図書館を丹念に使うことで、Webのデマ情報を潰すことに挑戦するとともに、新たな知のありかたを提言しています。彼は図書館を駆使しながら、何を学んで、何を考えてきたのでしょうか。

三三 大久保ゆうさん。翻訳家、英米文学研究者。高校生のときに「青空文庫」に飛び込み、いまではその中心人物の一人になっています。青空文庫はWebの新しい図書館のように思えますが、そもそも図書館の源流を再発見・再構築したものであったなんて、ぼくは彼と話すまで、全く気づきませんでした。

最後の第四章は「これからの図書館を作っている人々」。次世代の図書館を作り支えている縁の下の力持ちで、なおかつワクワクする仕掛けを構築している人々にインタビューしました。

四一 大場利康さん。国立国会図書館員。国立国会図書館は日本最大の図書館です。国会図書館にはいくつかの目的はありますが、日本で発行されるすべての本を網羅的に収集し、保存を行っています。その中で驚くような仕組みを仕掛けている彼に、好奇心の源泉を問いました。

四二 花井裕一郎さん。まちづくりアドバイザー、小布施町立図書館元館長。地方の小さな図書館を日本一チャレンジングでワクワクする図書館に演出し、現在は地域活性化に尽力しています。近くにいるだけで幸せになる人って、そんなに、いないですよ。

四三 原田隆史さん。日本の図書館情報システムを最先端で研究し、未来を見据えている先生の、これまでとこれからをお伺いしました。個人的にいつもお世話になっているにもかかわらず、もともと彼は図書館情報学にはそれほど興味が無かったとは驚きでした。

本書で登場していただいた方々は、ぼくから見たら全員が全員、モンスター・マインドとも言うべき人々です。右往左往しながらインタビューを申し込み、お会いする前にはドキドキして、ほぼ毎回、手が震えたことを覚えています。同行の編集者がぼくのみつともない姿を証言してくれるでしょう。しかし、いざ集中して話し始めると、相手がどんな人であろうと遠慮なく話ができるほどのありがたひが発動しました。もしかするとそれは「知」の前には皆フラットであるという信念があるからかもしれません。

本書の読み方は様々、お好みに合わせて読んでいただければと思います。あの人はこんなふうな図書館を使ってきたんだ！という発見があれば嬉しく思いますし、彼らのライフストーリーから人生のヒントを抽出することも可能でしょう。もちろんディープな図書館の使い方を真似することもできると思います。いずれにしろ本を置いているだけではない、図書館の奥深さを感じていただければ幸いです。

もし、この本を手にとったあなたが背伸びをしたがつてる高校生だとしたら、知の世界はこんなにも広がっているということを想像してもらえると嬉しく思います。子育て中の親御さんでしたら、もしかすると育児本の一冊としても読めるかもしれません。そして図書館司書の皆さんに、あなたたちの仕事はこれまでこんな成果を出している、次世代に繋がるこんな仕事をしているんですよ、とエールを送りたいと思います。

本書はどこから読んでいただいても大丈夫なように構成されています。また、読んでいるうちに自然と専門用語（図書館、あるいはそれ以外）にも触れていただけるように、できるかぎり註を付けました。もし註が付与されていない、あるいは説明に物足りないということがありましたら、ぜひ、ご自身で調べていただけると幸いです。

さあ、トップランナー達の知の世界へ。



はじめに 1

I……スペシャリストを鍛えた図書館

魔法使いとライブラリ

落合陽一 14

プログラミング少年、図書館で育つ

清水亮 36

バッタ博士、図書館から生まれる

前野ウルド浩太郎 58

II……プロフェッショナルの使い方

物語を紡ぐ人、物語と出会う場所

三上延 82

読書が今よりも輝いていた頃

竹内洋 106

あなたが好きな本をあなたが好きな人が知らないのは悔しいですね？

谷口忠大 130

III……Webの時代の図書館を活用する人々

小さな数学者たちの対話の場

結城浩 154

宝の山の掘り出し方

萩上チキ 178

図書館と青空文庫の秘密な関係

大久保ゆう 202

IV……これからの図書館を作っている人々

デジタル・ライブラリアン

大場利康 226

だから、みんなが集まった

花井裕一郎 252

情報検索に魅せられて

原田隆史 274

トップランナー達の見た図書館のこれまで、そしてこれから

あとがき 313

トップランナーの図書館活用術  
才能を引き出した情報空間

# I

スペシャリストを鍛えた図書館

SAMPLE

高等学校の前で別れる時、三四郎は、「ありがとう、大いにも  
足りた」と礼を述べた。すると与次郎は、「これからさきは図書  
館でなくっちゃもの足りない」と言っって片町の方へ曲がってしまっ  
た。この一言で三四郎ははじめて図書館にはいることを知った。

(夏目漱石『三四郎』より)

# バッタ博士、図書館から生まれる

## 前野ウルド浩太郎

Koutaro Uld MAENO



写真…川端裕人氏撮影、前野氏提供

一九八〇年、秋田県生まれ。弘前大学農学生命科学部卒。神戸大学大学院自然科学研究科博士課程修了。博士（農学）。  
人呼んでバッタ博士。ウルドというミドルネームは西アフリカ・モーリタニアで最高敬意の「子孫」の意味を持ち、フィールドワーク先で見込まれて名乗ることを許されたのだとか。彼の著書『孤独なバッタが群れるとき』は研究の楽しさを抱腹絶倒の筆致で十二分に伝えつつ（笑いすぎ）て涙が出ました。時として若手研究者の悲哀や失敗を鮮やかに描き出す名著です。えー、虫？ きもちわるい、なんて言わないで下さい。そこには本人が愛する研究対象があり、誠実な視線があります。彼の研究者人生のきっかけは図書館で出会った『ファーブル昆虫記』でした。  
インタビュウ中、前野さんは常にわたしにまっすぐ射抜くような視線を向けてきました。こんな眼差しで前野さんは研究しているのでしょうか。稀代のトリックスターにして誠実なる昆虫学者。昆虫学者と図書館の関係、お楽しみあれ。

2016. 8. 26  
於 JIRCAS

### 前野少年、ファーブル昆虫記に出会う

**前野** 小さい頃から虫や動物が好きで、母が図書館で『ファーブル昆虫記』や『シートン動物記』を借りてきてくれて読みました。虫を観察すると謎に思うことだらけで答えがわからずモヤモヤしていて、そんなときに『ファーブル昆虫記』を読み、昆虫学者になったら己の力で謎解きできるのかと感動しました。それがきっかけにもなり、将来は昆虫学者になろうと思っただけです。まさに図書館から借りてきた本で、自分の運命が決まりました。  
——それって何歳ぐらいの頃ですか。

**前野** 小学校低学年です。今はバッタの行動を野外で観察することが多いのですが、これまで知られていなかった現象をバンバン発見できていて、小さい頃のトレーニングの成果が活かしていると思うんです。例えば、第一線のアスリートは、幼少期から競技を始めている。自分も昆虫学の分野で世界の一線で戦うとしたら、虫を見る英才教育を自然から受けてきたので、観察眼を武器にしたら世界で戦えるかもという、もくろみもありました。

——英才教育というと、親御さんから虫捕りをやれ、みたいなものは？

**前野** 虫捕りを強要されたことは全くなかったです。ただ、家族でキャンプに連れていってもらいまして、親父が街灯によじ登ってミヤマクワガタを捕ってくれるんです。黒いダイヤを手渡され、親父の株が急上昇（笑）。海に潜れば、ウニやサザエを捕って、晩ご飯のオカズに加えてみたり。親父は自然と接する機会を、母は図書館の本を借りてきてくれて知識を与えてくれましたね。昆虫学者になろうとしたきっかけは両親だったと確信しています。

小学校のときは自主的な文学活動はほとんどしていません。主にマンガ。ただ誕生日プレ



前野ウルド浩太郎『孤独なバッタが群れるとき』東海大学出版部、二〇一二年



——すごくいい所でしたね、土崎。すこーんって空も抜けてて。

**前野** 港町だから明るいです。年に一回、七月の二〇日にお祭りがあって、一番この町が盛り上がる時ですね。

——図書館員さんに教えられた面白い本もありまして。土崎には『種時く人』って社会運動で有名な雑誌があったんです。その同人に小牧近江<sup>\*</sup>という、のちに法政大学の教授になる方がおられるんです。その人が昭和二九（一九五四）年に『ファール昆虫記』を訳していたんですね。なので土崎とファール昆虫記は、前野さんだけでなく実は歴史的にもつながっていたという。

**前野** そうなんですか。いやあ全く知らなかったですね。

### 小学校から高校時代

**前野** 小学校の図書館も結構使いました。おつきい図鑑を眺めてました。ただ、まともな文章を読む行為は、大学に入るまではほとんどしていませんでした。

——虫博士ってクラスのなかではどうなんでしょう。

**前野** 重宝されたことはありませんでした。加えて、肥満児だったので、モテませんでした。虫が大好きだからって嫌

ゼントとして両親が昆虫図鑑を買ってくれました。このあいだ実家に行ったらまだありました。ポロポロになるまで読み込んでいたらしく、当時の自分は相当気に入ってみたいですね。

——虫捕り、懐かしいなあ。わたしも子供の頃、トンボ捕りで溝に落ちて頭から大出血して、救急車で運ばれたのを覚えてます(笑)。

**前野** よくありますよね、虫捕りで。怪我。

——お生まれは秋田県の土崎ですよ。調べたところ、土崎図書館の新館がオープンしているのが一九九一年なんです。利用されていた図書館、新館か旧館か、覚えておられますか？

**前野** 子供のときは旧館のほうに行っていました。新館には高校のときからお世話になってるんです。中学のときは読書も図書館も疎遠になってたんで。高校三年生の夏、部活が終わってから受験勉強を始めまして。そのときに図書館には勉強する場所として通っていました。夢のきっかけとなった『ファール昆虫記』を借りてきたのも、夢をかなえるためのトレーニングをさせていただいたのも土崎図書館なんです。

——実は先日、実際にちょっと土崎に行ってみまして(図面や写真など資料を取り出す)。

**前野** ええ！わざわざ秋田まで?! どれだけ今回の取材のために気合い入れているんですか！ 懐かしい。これはやられました。

——だって前野さんもバッタの調査でアフリカのフィールドに行かれるわけですよ。もちろん前野さんの規模よりはずっと小さいわけですけど(笑)。

**前野** 図書館が駅のすぐそばにありまして。隣のスポーツクラブのスイミングスクールにもちょっとだけ通っていました。父はJR東日本の職員だったので駅で働き、自分はプールで泳ぎ、母が図書館から本を借りてくる。ものすごく近いところに家族の生活圏がありました。それにしてもこの資料、ちょっと感動もんですね。こんな必殺技を仕込んでいたとは(笑)。

秋田市立土崎図書館



『種時く人』  
一九二一年 小牧近江、金子洋文、山川亮を中心に旧土崎港町にて発行された文芸雑誌。反戦・国際主義などを主張した。

小牧近江(こまきおうみ、一八九四〜一九七八)。  
社会学者、翻訳家。一六歳で渡仏し、パリ大学法学部卒業。平和主義を唱えるクラルテ運動に参加し、帰国したのち、『種時く人』を創刊した。



悪される存在ではなかったと思います。

——今はしゅつとされてますけど。いつですか、脱皮されたのは。

**前野** 高校でテニスを始めて一五キロ痩せて、軽快になりました。そのときまではご飯は全力で食べなきゃいけないと思ってたんですね。それを腹八分目にして運動したら、みるみるうちに痩せて。ずっと食べ方を間違ってたみたいです(笑)。

——なるほど。友達の読書行動の状況はよく知らない、周りに読書家の友達はいなかったとメモをいただきましたが、当時の友人たちとの共通する話題はどんなでした。

**前野** 知的な活動をしていた覚えは全くないです。小学校の四、五年生くらいの子の休み時間はいつもドラゴンボールごっこ。大体クラスのヒエラルキーのいい人たちから主役を取られて、自分はヤムチャか、よくてクリリンですね(笑)。なかなか主役になれなくて。テニスでも補欠にも入れなくて表舞台にいけなかったんですね。それが今、昆虫の研究で講演や発表するときは自分一人だけ注目を受ける。それが気持ちいいんですよ。当時の同級生に会うと「え？博士になったの？」とか。久しぶりに昔の友達に会って声掛けても、痩せてるから「誰？」って。びつくりさせるのも快感になっていきました。小さい頃から、クラスのみんなを笑わせようとしていた覚えがあります。ウケた記憶は皆無ですが。講演でも、一般の人たちの前に行くかどうかという笑いを取りにくい傾向があります。

——高校では図書館で勉強をされていたと先ほど伺いましたが、どんな利用方法でしたか。

**前野** 学校が終わるとすぐ図書館に行つて受験勉強始めて、気晴らしに虫の本を見たり不思議な動物の本を見たり。写真で頭の疲れを癒やして、また受験勉強に戻るっていう感じでした。図書館には自分の高校の制服着た人たちがかなりいて。あ、そのうち、図書館に通っていた別のクラスの子と仲良くなった、という記憶がうっすらあります。……ああ、ありましたねえ。

——あー、甘酸っぱいなあ。

## 昆虫研究のトレーニングを開始する

**前野** 高校三年生の夏休み、オープンキャンパスで弘前大学に行つたんです。自分の偏差値とも相談して、赤本を見てどこの大学に昆虫の研究室があるのかを調べて。秋田は農業県なのに、秋田大学には昆虫の研究室がある農学部がないんです。農作物を食い荒らす病害虫の問題を解決するための研究が農学部で、生物として昆虫を扱うのは理学部。大学や研究室によって特色はかなり違います。農学部は害虫の研究をするところが多いです。もちろん基礎研究として、生物の面白さを解明するところもあります。

——大学を狙うとき、応用か基礎か考えてましたか。

**前野** 全く考えてなかったです。とにかく国立に行きたいって思っていました。当時通つた高校の生徒の半分は就職、半分進学なので、国立大学に行く人はかなり少なかったんです。——相当勉強ができたほうなんですか。

**前野** 高校三年生の頃は、二五〇人中、二〇〇何番(笑)。これではまずいって追い上げました。半年で一七番目ぐらいます。でも、結局その年は落ちてしまいました。一浪して、次の年に無事に弘前大学に受かったんです。

——大学図書館の利用はいかがでしたか。

**前野** 大学図書館はほとんどレポート作成のためだけに利用していました。例えば、果樹園芸、気象学であったり、土壌であったり。結構いろんな農学系の授業を受けてましたね。家

ヤムチャ  
鳥山明の漫画『ドラゴンボール』に登場するキャラクター。かませ犬といったイメージを持たれることが多い。

赤本  
教学社が発行する、大学受験用の問題集。